

〈開かれている〉ことの 責任と楽しさ -- 人文学の危機を越えて

名古屋大学大学院文学研究科 准教授

日比 嘉高



専門は日本近代文学・文化論。日系移民文学・出版文化などの研究も進めている。近著『ジャパニーズ・アメリカ』（新曜社 2014）、『いま、大学で何が起きているのか』（ひつじ書房 2015）。

「大学の〈知〉の現在を考える」名大アゴラ・連続セミナー（第1回）より

はじめに

今日は、「名大アゴラ」という〈自由・平和・民主主義を愛し戦争法制に反対する名古屋大学人の会〉による連続セミナーの第1回にあたって、私自身がどのようなことを考えているのか、ということをお話したいと思います。それは、いま大学や、あるいは「学者」という存在に、何が求められているのだろうか、ということを考えるということでもあります。

1. 路上に出た学者

去年の夏、私はデモに参加しました。国会議事堂の前の抗議集会にも参加しました。私にとって、そうした行動や集会に参加するというのは初めての経験でした。これまでは、問題だと思った出来事があっても、それに反対するために腰を上げるまでには至りませんでした。なぜ、そんなものぐさな私が、わざわざ街に出て行き、反対の声を上げようと思ったのか。

危機感と、怒りでした。

御承知のように、そういう学者は、私だけではありませんでした。私たちの〈自由・平和・民主主義を愛し戦争法制に反対する名古屋大学人の会〉のような大学教員たちの組織が、2015年のうちに次々と全国各地で結成されました。その中核的な存在となったのが〈安全保障関連法に反対する学者の会〉ですが、そのウェブサイトにもまとめられた「各大学の取り組み一覧」をみると、150を超える大学教職員や研究者の組織ができたということがわかります。大学に所属する教員たちの活動としては、未曾有の規模だと言っていいと思います。これまでの日本の大学の歴史の中で、教員たちの反対組織がこれだけ広がったことがあったでしょうか。

安保法制の話から、もう少し視野を広げてみます。2015年5月には、米国など海外の著名な日本研究者たちが「日本の歴史家を支持する声明」というものを出しています。各新聞も比較的大きく報道しましたし、ネットでも話題になりましたので、覚えていらっしゃる方も多いかもしれません。これは、民族主義による歴史の歪曲や、女性の尊厳に対する冒涇、政府や個人による歴史の操作・検閲・脅迫について憂慮するものであり、こうした動きに対抗する日本の歴史家たちをサポートしようという意図で出されたものでした。

つまり、現在の政治動向に対する、研究者コミュニティの危機感の広がり、これほどまでに大きかった。そして、実際に多くの学者たちが、実際に声を上げ、路上にも出たのです。

では、私たちの声は届いたのでしょうか。国会議事堂の中に。あるいは、世の多くの人たちに。

届いたのだらうと思います。ある人たちには——。一つの発言が別の発言を呼び、賛同の声を集め（もちろん批判の声も）、議論が起こり、人々が関心を深めたり、決意をあらたにしたりするようすを、私はこれまで見てきました。声は届いていたと思います。

一方で、届かなかったのだらうとも思います。たとえば国会の中の与党には——。国会議事堂を数万人が取り囲み、同時に全国で数十万人の人が集まり、行進し、コールし、プラカードを掲げ、叫びつづけたにもかかわらず、議事堂の中の推進派は、法案を通しました。彼らに、声は届かなかった。

そしてもっと大切なことには、国会の中だけでなく、世の中の多くの人にも、声が届いたとはいえない。御承知のように、あれだけ盛り上がった反安保運動のあと、内閣支持率はあっという間に回復しました。現在もいろいろな調査で差はありますが、40%を越える支持率があります。

なぜでしょうか。私たちに、いまいったい何ができるのでしょうか。私が「名大アゴラ」という、名古屋大学で行う連続セミナーの企画に協力しようとした出発点には、こうした模索の思いがあります。

2. 文系廃止論と市場主義

ここで少し、議論を迂回させます。国立大学をはじめとした日本の大学が、いま激しい「改革」の波にさらされているのはご存じでしょうか。とりわけ、私も籍を置く人文科学系の学部・研究科に対する風当たりは、強いものがあります。

先日、読売新聞が作っている「読売教育ネットワーク」というウェブサイトで、現在金融庁参事官をしていらっしゃるという神田眞人氏に対するインタビュー、異見交論「今のままの大学では生き残れない」（2016年4月7日）という記事を読みました。この方は、財務省主計局主計官として大学への予算配分などに関わってきた方だそうですが、「日本の大学が、魅力がない

という烙印を押されているのも事実」「研究も教育もしない人ほど暇ですから、改革の邪魔をする」などと発言していらっしゃいます。要するに、「努力したら配分が増える」「さぼっていたら減る」という市場主義的、経済優先、儲け主義の論理を大学にまで当てはめよう、という方向です。

神田氏は大学改革の問題を論じていながら、その中身については、まともに言及していません。最後の最後で「謙虚に古今東西の書物や多様な人から学び、広い世界観をもち（中略）自分で吟味して、世界の一員として判断できる、そういう主権者」を大学は育てて欲しい、ということをとってつけたように言っていますが、そこまでの話の99パーセントが、がんばらないと予算は出せないということに終始しています。そして、氏の言う「良い」教育・研究、「良い」大学というのは、なんなのか、まったく言及されることはありません。

たぶん、それを言うことができないのでしょう。当然です。日本の大学は多様です。学部が10以上あるような大規模大学もあれば、学部一つの単科大学もある。教育大学もあれば芸術大学も体育大学も、水産系も畜産系もある。大都市の大学も、地方の大学もある。研究指向の大学も、実業指向、資格指向の大学もある。それぞれに役割があるのです。それを、限られた尺度の中で競争させるのは、どだい無理な話です。

儲かるところに資本を集中し、不採算部門を潰していく、こういう経営方針を、「選択と集中」といいます。大学は今、この経営の論理である「選択と集中」のプレッシャーの中にあります。

矢面に立ったのが、人文社会科学系の学部・大学院と、教員養成系の学部のゼロ免課程です。文科省や、その背後にいる財務省の発想からいえば、これらの分野は、社会的な要請に合致していないのだそうです。

冗談ではありません。これらの学問分野が向き合っているのは、「人文」であり「社会」です。私たち人間の過去、現在、未来の社会そのものです。歴史上の成功や過ち、言葉の仕組み、芸術や人の想像力のより深い理解、社会の動態の把握、法体系の整合性の確保や安定的な運用、教育や社会的格差、差別、不正義、文化的多様性など、さまざまな現代の課題に取り組むのが、

人文社会科学です。

この学問領域を狭めることは、簡単に言えば私たち自身の「人間」や「社会」へのアンテナを狭め、感度を鈍くし、問題を問題として認識しない、できない世の中になり、そういう人間を育てることにつながっていきます。そこで私たちは眠らされていくのです。

高度な思考をし、先端的な研究に従事するのは一部の大学だけで良い。それ以外の大学は、地域が求める人材を供給する地元向けの人材バンクになるか、あるいは職業訓練校として「社会的ニーズ」に合致した技術者を養成していく。

この政策を推し進めている人たちは、その危うさをよく考えないままプランの着実な実行にだけ汲々とする機械のような人物か、あるいは大多数の人々は眠っているのがよく、決めるのは一部のエリートだけで良いと考えているエリート主義者です。彼らは、教育を信じていないし、学問を信じていない。

「反知性主義」という言葉が脳裡をよぎります。この言葉はとても難しく、使うのに注意を要する言葉です。だがたしかに、私たちの国の高等教育政策には、反知性主義の匂いを感じることがあります。

この春、現在の政権に批判的だとされる3人のキャスターが相次いで番組から降板しました。昨年12月に予定されていた「表現の自由」に関する国連特別報告者の来日が、政府の要請で突然延期されたという事件もありました。判断基準が不明確という指摘もありますが、〈国境なき記者団〉による日本の報道の自由度は、下落を続け、2016年には180カ国中、72位まで落ちたそうです。

メディアの世界で起きていることと、大学の世界で起きていることは、かなり違う論理で動いていますが、結果は同じところに行き着くことになりはしないでしょうか。

3. 反知性主義？

さて、私たちに今何ができるのか、という問題に戻ります。学者たちはいろいろな形で声を上げました。路上にも出ましたし、メディアにも出ました。組織も作りまし、個人でも発言しました。

しかし、安保関連法案に限っていえば、法案は通りました。私たちの声は、届いたところもあるだろうし、届かなかったところもある。けれど結果として、止めたいものは止められなかった。

ではこれで終わりでしょうか。そうではない。終わりではない理由は、安保法制の問題が終わっていないということもありますし、かなり押し返した結果、法案の制約を大きくすることに成功した、ということもあります。が、それだけではありません。

私たちの社会は、いま大きくバランスを崩しつつある、そう私にはみえます。個人よりも、公が強くなるような時代が来つつある。ここでいう「公」とは、個人同士が議論や相談によって作りあげる、公共的な空間のことではありません。権力を持ったものが、権力を持たないものを従わせ、その空間を支配するという意味での「公」です。権力を監視し、その暴走を止めるための社会的装置が、次第次第に解除されつつある。

しかも少なからぬ人々がそれを支持している。背後にあるのは、不安定さへの怖れだと思います。経済的な格差、貧困、そして歴史問題や経済競争に起因する東アジアの国々との間の対外的な緊張が、社会を安定化したい、強いリーダーシップをもって、この国のセキュリティを高めて欲しい、という要求を後押ししているように思います。

こうした欲求をもつ人たちは愚かでしょうか。

たしかに、あきらかに主権者として、市民としての自分の首を絞めるような改憲を支持するようなふるまいは、理性的とは思えません。テレビや新聞が垂れ流す、政府の主張そのままのメッセージを受け取り、頻繁に露出する与党政治家の顔ぶれに慣れ親しんで、あまり深く考えることなく支持しているという人たちもいるでしょう。

しかし、そういう人たちを指して「反知性主義」の言葉を用い、深く考えない風潮を嘆き、愚か者呼ばわりして遠ざける、あるいは激しく対立する。そうしたふるまいが私には良いとは思えません。

最近、とても印象的な経験をしました。知人と話していて話が国旗国歌の話に及びました。大学で国歌を歌わないことが「恥ずかしい」と述べた、文部科学大臣のニュースが話題になった後のことでした。知人はこう言いました。「国立大学では、国歌を歌って当然だと思う。国立大学は、俺たちの国を支える中枢的な人材を育てる機関だろう。そのために税金が使われている。その国立大で、国の方針に反するようなことを是とするような教育が行われては困る」。

こうした考え方に反駁するのは、それほど難しくはありません。この論裡は「国」という語で呼びながら、政権と国民が構成する社会とを、ごっちゃにしています。政権が道を誤ったとき、国民は被害を受けます。国民のために、政権の指示に反することをを行う、ということが当然ありえます。

もう一つ、現在の国立大学には数多くの外国人が所属しています。ヨーロッパでは、大学の起源は国民国家よりも古いです。つまり、大学という仕組みは、そもそも「国」というものの範囲を超えているのです。

たとえば私は日本文学の研究者です。しかし私は日本文学を、日本民族・日本文化の優秀者を称揚するために研究しているのではないし、日本国の文化がますます発展することを目的としてやっているわけではない（発展することは素晴らしいことだと思うので、それを否定しようというわけではありません）。

その証拠に、私の日本文学の研究仲間は、アメリカ人も韓国人も中国人も台湾人もドイツ人もフランス人もいます。私の指導学生の半分は、留学生です。彼らはもちろん、日本文学が好きで、日本文学が面白い、素晴らしいと思って研究している。しかし、別に日本国のためにそれをやっているわけではない。そういう彼らに、国歌を歌わせるのでしょうか？ 勘違いしてもらっては困ります。大学は国の枠内にもありますが、国を超えている部分もあるのです。

夏目漱石は小説「三四郎」の中で登場人物にこう言わせました。「熊本よ

り東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」「日本より頭の中の方が広いでしょう」「囚われちゃ駄目だ。いくら日本の為を思ったって聾盲の引倒しになるばかりだ」。三四郎が、汽車の中で出会った広田先生の言葉です。私は、この広田先生のセリフが大好きです。

反駁するのは簡単ですが、しかし、私はこの知人とのやりとりが、ずっと気にかかっています。知人は優秀な方で、ある分野の専門職に就いています。誠実で責任感も強い。そういう人物が、こういう論理を使う。日本の国のためを思ってこう言っているのでしょうか。真面目で誠実で責任感が強いからこそ、こういう風にいう人たちがいる。「国益」という言葉がキーワードになる時代です。

支持率40%を切り崩すためには、支持者たちを愚か者扱いしては失敗します。愚か者扱いは、相手を理解不能な「他者」にしてしまいます。同時に、自分自身を、その他者と対立する硬直した善玉にしてしまいます。そこには、対話の回路、説得の筋道が、ありません。

4. アラームをどう鳴らすか

最近、私は災害心理学の文章を少し読みました。そこで、面白い言葉に出会いました。「多数派同調バイアス」「正常性バイアス」。なぜ災害時に逃げ遅れる人が後を絶たないのか、そのことを説明するために考えられた、人の認知の偏りを説明するための概念です。なぜ人は逃げ遅れるのか。災害心理学は、〈他の多くの人が逃げないからまだ大丈夫〉〈これはまだ普通の出来事の範囲だ〉という思い込みから、緊急時の避難行動が遅れると説明するのだそうです。私はこの説明に、深く納得しました。

人々に避難行動を起こさせるためには、これは異常事態だ、普通ではない、ということを明確に知らせるアラームを鳴らすことが大事です。私は、すでに日本の政治的状況は非常時に入っていると考えています。目と耳がふさがれつつあり、止めるべきブレーキが無効化されつつあります。「多数派同調バイアス」「正常性バイアス」の中で眠ったようになっている人たちに、目

を覚ましてもらう必要があります。アラームを、適切に鳴らさなければなりません。それぞれの立場で。それぞれの持ち場で。

大学は、学者は、ではどうでしょうか。これから、何を行うべきでしょうか。時間がないので、私の考えの要点だけ述べます。学者の発するアラームの力の源は、専門性と、権威性です。知識・知見にもとづいた、正確な事実、バランスの取れた見解、広い視野から見た分析を提示する。知的な拠り所としての役割が、求められています。

私がもう一つ重要だと思うのは、アラームを受け取る感受性の養成です。だれもが危機感を持てる大きな警鐘を鳴らせばよいですが、それは簡単なことではない。それよりも、大学にとって重要なのは、社会で起こっていること、問題を抱えていることを鋭敏に察知し、それを周囲と共有していけるような感性と能力を持った人間を育てることではないでしょうか。大学という研究と教育の場は、そのためにできることが多くあります。とりわけ、人文社会科学の知見は、たくさんの考える種を提供できます。

しかし、大学の中だけでは十分ではない。昨年夏の路上に出た経験のなかで、私だけでなく、多くの大学人が、それを痛感したはずで

おわりに

大学の知を、社会につなぎ直さなければならない。そしてそのためには、大学人が、社会の知に、もっとつながっていかなければならない。今日、話のタイトルにしました、〈開かれていること〉というのは、このことを指します。大学の知は、もっともっとさまざまなチャンネルで開かれているなければならない。そしてそれは一方通行であってはいけない。社会の課題、社会の感性、社会の智恵を、大学はもっともっと貪欲に取り込まなくてはならない。

それは大学人にとって新しい出会いになるでしょう。〈開かれていること〉は、大学の責任であるとともに、大きな喜び、たのしみになるはずで